

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2006～2009

課題番号：18202009

研究課題名（和文） モダニズムの世界化と亡命・移住・難民化

研究課題名（英文） Global Dissemination of Modernism and Human Diaspora

研究代表者

西 成彦（NISHI MASAHIKO）

立命館大学・大学院先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621

研究成果の概要（和文）：

20 世紀は西洋起源のモダニズムが世界へと広がりを見せた世紀だったが、これは西洋近代のグローバルな浸透の結果であるとともに、知識人を含むグローバルな人口の移動がもたらしたものである。とりわけ、こうした移動を誘引した近代的な社会変容に対する芸術家たちの批判的姿勢を抜きにしてモダニズムを捉えることはできない。それらをヨーロッパ・北米、ラテンアメリカ・中東、東アジアに地域を絞ることで解き明かした。モダニズムを西洋近代との交渉の手法とみなすという結論に達したが、東アジアにおけるモダニズムの展開において、日本のモダニズムが果たした逆説的な役割についても一定の解答を見出せた。

研究成果の概要（英文）：

Modernism, construed as an invention of the Euro-American world, was disseminated over the whole earth together with the progress of economical and cultural globalization. This worldwide phenomenon was accompanied by the dissemination of traveling or displaced writers, endowed with a critical attitude toward the modernizing power in which they were involved. In our collaborative efforts we scrutinized various cases while focusing on the three target fields: 1) Europe and North America, 2) Latin America and the Middle East, and 3) East Asia. Our main conclusion is that everywhere modernism constitutes a method of negotiation with the prevailing Euro-American (colonialist) type of modernity. Additionally, the paradoxical role which Japanese modernism played in the East Asian modernist movement was also clarified to a large extent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2007 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008 年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2009 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
総計	16,100,000	4,830,000	20,930,000

研究分野：比較文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：モダニティ、モダニズム、植民地主義、アヴァンギャルド、亡命、移民、難民

1. 研究開始当初の背景

対象地域・対象言語を越えた比較文学的な共同研究で、科学研究費補助金に基づく共同研究「20世紀初頭の欧米および日本におけるモダニズム運動の総合的研究」(1990-1992年度、研究代表者:濱田明)および「20世紀アヴァンギャルド諸潮流と表象文化の現在—モダンから越境へ」(1998-2000年度、研究代表者:大平具彦)を土台にして共同研究を重ね、今日に至っている。当初は、欧米モダニズムと日本モダニズムの対照研究であったが、そもそも欧米のモダニズム研究が言語別の縦割りになっている日本の状況の中で、画期的な共同研究のあり方を示した。本研究はこれまでのモダニズム研究会の活動を継承・発展させるものである。

2. 研究の目的

本共同研究では、欧米起源のモダニズムがどのように世界へと波及したかを見るという影響論的な視点を離れ、むしろ欧米(西欧・北米)から近代とモダニズムを受け取った非欧米地域(東欧を含む)の側からモダニズム運動の闘争姿勢をとらえるという方法をとった。そうすることで、欧米モダニズムのローカルな特性も見えてくるし、何よりグローバル化の途上にある世界の中でモダニズム芸術に期待された役割も見えてくるはずだからである。

3. 研究の方法

1) グローバル化とモダニズムの世界化が、人口移動(亡命・移住・難民化などのディアスポラ)を伴うものであったことに注目する。

2) 対象地域をヨーロッパ・北米、ラテンアメリカ・中東、東アジアに分け、これらエリア間の人口移動やモダニズムの伝播、またエリア内の人口移動やモダニズムの伝播を個々におさえる。

3) 東アジア地域のモダニズムにおいて、欧米と他のアジア地域のあいだの媒介者として日本が果たした役割に十分留意する。

4. 研究成果

まず、三つの地域のモダニズムそれぞれについて新しい知見が得られた。

1) ヨーロッパ・北米地域に関しては、著書『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』でフランス・シュルレアリスムの地域性・特殊性を浮かび上がらせた鈴木雅雄が、『ゲラシム・ルカノフ=オイディプスの戦略』では、モダニズム運動の東欧・西欧間でのズレを描き出すに至った。著書『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』でベンヤミンの言語論の読み直しを試みた細見和之が、『ワルシャワ・ゲッターにおける「闘い」—イツハク・カツェネルソンの大作「ラジンのレベの歌」をめぐる』では、ワルシャワ・ゲッターに、モダニズムとリアリズム

の究極的な形を見てとった。また、石川達夫はチェコのナショナリズム思想をめぐる著書『チェコ民族再生運動』を刊行し、黒田晴之は北米や上海などへと運ばれていった東欧ユダヤ人の大衆音楽の変容をめぐる著書を準備中である。北米に関しては、長畑明利がエズラ・パウンドについて研究を深めたほか、ニューヨークのハーレム・ルネッサンスに関する新稿を準備中(近刊)。野坂政司は、ビートジェネレーションの移動とジャズの結びつきに関して論文を準備中。

2) ラテンアメリカ・中東地域に関しては、ヨーロッパや北米との癒着・対抗関係、さらにはラテンアメリカ内部での人的交流を背景に、ダイナミックに捉えた研究として、崎山政毅『アンデスのアヴァンギャルド:インドアメリカ主義・インディヘニスモ・ネオ=インディアニスモの関わりから』、久野量一『世界は変わり続ける—「わが悲しき娼婦たちの思い出」論序説』などが成果として公表された。安藤哲行は、現代ラテンアメリカ文学と越境に関して『マッコンドとクラック』を発表。また、崎山は、中米モダニズムについて、久野はキューバとアルゼンチンを往復した作家ピニエーラについての論考を準備中である(近刊)。他方、中東に関しては、岡真理が著書『アラブ、祈りとしての文学』において、これまでモダニズムとの関連で取り上げられることの少なかった中東・北アフリカの20世紀文学を西洋植民地主義(およびイスラエル・シオニズム)との対抗関係の中でのモダニズム表現として読み解いた。

3) 東アジア地域については、成果を三つに類別する。

東アジア近代文学の中での日本(語)の位置を見極める研究として、西成彦の論文“Frontiers and Borderlands of Japanese (language) Literature”、および木村一信が編者のひとりをつとめた二冊の論文集『<外地>日本語文学論』、『韓流百年の日本語文学』がある(執筆者として西成彦が両書に参加)がある。日本(内地)からすれば「外地」に他ならなかった「植民地」地域のモダニズム運動が植民地主義に対する対抗的な表現を模索する中でモダニズムに突破口を見出そうとしたことが明らかにできた。西成彦・崎山政毅(共編著)『異郷の死/知里幸恵、そのまわり』もまた日本への同化を迫られたアイヌ系表現者の表現とモダニズムの関係を論じている(執筆者として細見和之が参加)。また鈴木将久は、『日中戦争下の「純粹詩」— 路易士の詩と詩論』で東アジア・モダニズムの発展の中で日本が占めた位置を見定め、エリス俊子は、大連のモダニズム詩誌『亞』についての論考を含む、単著『詩的

モダニズムの近代』を準備中(近刊)。

日本の敗北によって、東アジア地域の文化的な布置は大きく変容するが、冷戦状況の中で大きな人口移動が生じ、その結果としてさまざまなマイノリティのモダニズム表現が生み出された。池内靖子・西成彦(共編著)『異郷の身体/テレサ・ハッキオンチャをめぐる』は、韓国系アメリカ人モダニストの表現を論じた論考の集大成であり(執筆者として長畑明利が参加)、また冷戦状況の中にある東アジア地域における前衛芸術については、李静和(編著)『残傷の音』が編まれ、芸術批評の新しい切り口を示した(執筆者として池内靖子が参加)。

明治以降の日本モダニズムに関する研究にあたっては、中川成美が視覚性を切り口に『モダニティーの想像力』を、池内靖子が演劇的身体の変容をめぐる『女優の誕生と終焉』を、また林少陽は、東アジアを「漢字圏」として捉えることで『「修辭」という思想:漢字圏言語論的批判理論のために』という野心的な著書を刊行した。いずれも東アジア地域のモダニズムを考える上で、今後の研究が避けては通ることのできない重要な達成である。

- 4) このようにそれぞれの地域のモダニズムに関して重要な成果が挙げられたが、大平具彦の『二世紀アヴァンギャルドと文明の転換』は、東欧系フランス人ダダイスト、トリスタン・ツァラから、カリブのシュルレアリスム詩人エメ・セゼールを経て、日本のアーティスト、荒川修作までを、西洋文明の根底的批判者として取り上げた。また西成彦は著書『エクストラテリトリアル』の中で、カフカを含む東欧のモダニズム文学を追いながら、西欧・北米・南米へと活躍の地を拡大していった東欧系の表現者を大きく取り上げ、人口移動とモダニズム表現の関係について追究した。これら、地域を越え、言語を越えて、前衛表現者たちが対決したものの何であるかを明らかにする成果があらわれたのは、まさしく本研究会の活動の成果である。
- 5) 最後に、本研究会がひそかに意図したことに若手モダニズム研究者の発掘があった。研究会のたびに広く発表希望者を公募し、多くの若手研究者に協力を要請することができた。詳細は、下記ホームページを参照されたいが、モダニズム研究の世代交代を円滑に進める役割を果たすことも、中堅以降のわれわれにとってはひとつの使命である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

(雑誌論文)(計 15 件)

<ヨーロッパ・北米>

OHIRA, Tomohiko, "Entre le regard et les mots pictogrammes magiques de Serge Goudin-Thebia", Franc Doriac (dir.): *Une oeuvre de Serge Goudin-Thebia les guerriers de l'absolu*(査読有), Harmattan, 2007, pp.35-41.

石川達夫「パトチカとナショナリズム 「チェコ民族再生運動」とチェコ・ナショナリズムをめぐる」、『思想』、査読無、1004号、2007、pp.138-155.

井上明彦「アンリ・マティス 描くことを描く」、『絵画の制作学』藤枝晃雄・谷川握・小澤基弘(編)、日本文教出版、2007、pp.138-249.

黒田晴之「シャガールの描いた楽士はどんな音楽を演奏したか(1)(2)(3)」、『松山大学言語文化研究』、査読無、27-2、2008、pp.29-66, pp. 67-100; 29-1, pp.1-45.

細見和之「ワルシャワ・ゲッターにおける「闘い」 イツハク・カツェネルソンの大作「ラジンのレベの歌」をめぐる」、『大阪府立大学紀要:人間科学』、2009、査読無、pp.63-89.

Nagahata, Akitoshi, Pound's Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice, *Ezra Pound, Language and Persona (Quaderni di Palazzo Serra 15)*, Massimo Bacigalupo and William Pratt, Genoa, 2009, pp.113-125.

鈴木政雄「マルクス主義(から)の解放 ニコラ・カラスと1935年以降のシュルレアリスム美学」、*Etudes françaises*, 査読無、16, 2009, pp.162-175.

<ラテンアメリカ・中東>

安藤哲行「マッコンドとクラック」、『ユレイカ』、査読無、40-3、2008、pp.266-278.

崎山政毅「駄洒落によるブルジョア批判 「ニカラグア・反-アカデミー」運動の諸相」、『立命館言語文化研究』、査読有、2010、pp.154-183.

久野量一「世界は変わり続ける 『わが悲しき娼婦たちの思い出』論序説」『立命館言語文化研究』、査読有、2010、pp.185-192.

<東アジア>

IKEUCHI, Yasuko, "Performances of Masculinity in Angura Theatre: Suzuki Tadashi On the Actress and Sato Makoto's Abe Sada's Dogs ", *A Journal of Performance and Contemporary Culture*、査読有、1-2、2006、pp.8-27.

NISHI, Masahiko, "Frontiers and

Borderlands of Japanese (language) Literature”, *The Proceedings of East Asian-South American Comparative Literature Workshop 2007*, 査読有, Tezukayama Gakuin Univ., 2008, pp.103-119.

林少陽「現代思想としての西脇の詩学理論 そのロマン主義とヘーゲル主義批判をめぐって」『日本思想史研究』、査読有、9、2008、pp.74-100.

林少陽「漢字圏文脈のモダニズム文学 近代修辞批評系譜の中の横光利一の批評理論について」『比較文学研究』、査読有、92、2008、pp.47 - 64.

鈴木将久「日中戦争下の「純粹詩」 路士の詩と詩論」、『明治大学教養論集』、査読無、450、2010、pp.39-67.

(学会発表) (計5件)

崎山政毅「アンデスのアヴァンギャルド: インドアメリカ主義・インディヘニスモ・ネオ=インディアニスの関わりから」、社会思想史学会、2006年10月22日、法政大学市ヶ谷キャンパス

鈴木将久「竹内好と『魯迅』」、魯迅と当代中国文化工作坊、2008年5月28日、華東師範大学

エリス俊子「Modernismとモダニズム 創造性について」、シンポジウム:モダニズム受容の諸相:雑誌『詩と詩論』とその周辺、2008年11月1日、東京大学駒場キャンパス

西成彦「ディアスポラの系譜:日本軍政下の東南アジアと台湾・沖縄」、植民地文化学会、2009年7月11日、江東区東大島文化センター

西成彦「日本統治期の台湾日本語文学と複数言語使用」、国立成功大学工作坊、2009年9月21日、台南・成功大学

(図書) (計15件)

<ヨーロッパ・北米>

鈴木雅雄(著)『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』、平凡社、2007、368

鈴木雅雄(著)『ゲラシム・ルカノフ=オイディプスの戦略』、水声社、2009、252

西成彦(著)『エクストラテリトリアル』、作品社、2008、339

細見和之(著)『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』、岩波書店、2009、278

大平具彦(著)『二世紀アヴァンギャルドと文明の転換』、人文書院、2009、456

石川達夫『チェコ民族再生運動』、岩波書店、2010、511

<ラテンアメリカ・中東>

岡真理(著)『アラブ、祈りとしての文学』、みすず書房、2008、307

<東アジア>

池内靖子・西成彦(共編著)『異郷の身体 / テレサ・ハッキョンチャをめぐって』、人文書院、2006、286

西成彦・崎山政毅(共編著)『異郷の死 / 知里幸恵、そのまわり』、人文書院、2007、293

神谷忠孝・木村一信(共編著)『<外地>日本語文学論』、世界思想社、2007、327

木村一信・崔在喆(共編著)『韓流百年の日本語文学』、人文書院、2009、313

李静和(編著)『残傷の音』、岩波書店、2009、275

池内靖子(著)『女優の誕生と終焉』、平凡社、2008、345

中川成美(著)『モダニティーの想像力』、新曜社、2009、383

林少陽(著)『「修辞」という思想:漢字圏言語論的批判理論のために』、白澤社、2009、381

(産業財産権)

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

(その他)

ホームページ:

<http://www.ritsumei.ac.jp/~wkt26465/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

西成彦(NISHI MASAHIKO)

立命館大学・大学院先端総合学術研究科・教授

研究者番号:40172621

(2)研究分担者

木村一信(KIMURA KAZUAKI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号:20105365

中川成美 (NAKAGAWA SHIGEMI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 70198034

池内靖子 (IKEUCHI YASUKO)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号: 80121606

崎山政毅 (SAKIYAMA MASAKI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 80252500

大平具彦 (OHIRA TOMOHIKO)
北海道大学・言語文化部・教授
研究者番号: 90117698

エリス俊子 (ELLIS TOSHIKO)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号: 90242031

鈴木将久 (SUZUKI MASAHISA)
明治大学・政治経済学部・准教授
研究者番号: 00298043

鈴木雅雄 (SUZUKI MASAO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 20251332

長畑明利 (NAGAHATA AKITOSHI)
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号: 40179734

安藤哲行 (ANDO TETSUYUKI)
摂南大学・国際言語文化学部・教授
研究者番号: 70222785

石川達夫 (ISHIKAWA TATSUO)
神戸大学・国際文化学部・教授
研究者番号: 00212845

野坂政司 (NOSAKA MASASHI)
北海道大学・言語文化部・教授
研究者番号: 50113600

細見和之 (HOSOMI KAZUYUKI)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 90238759

岡真理 (OKA MARI)
京都大学・人間環境学研究科・教授
研究者番号: 30315965

井上明彦 (INOUE AKIHIKO)

京都市立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号: 30232523

林少陽 (LIN SHAOYANG)
東京大学・教養学部・准教授
研究者番号: 20376578

李静和 (LEE CHONG-WHA)
成蹊大学・法学部・教授
研究者番号: 90286899

久野量一 (KUNO RYOICHI)
法政大学・経済学部・准教授
研究者番号: 70409340

黒田晴之 (KURODA HARUYUKI)
松山大学・経済学部・教授
研究者番号: 80320109